

和漢薬の卒前・卒後教育への新たなとりくみ

日本東洋医学会の教育指針

佐藤祐造

名古屋大学総合保健体育科学センター

平成13年3月に発表された「21世紀における医学・歯学教育の改善方策について」では、モデル・コア・カリキュラムの「診療の基本」において、医学部教育6年間で薬物の基本的な知識を持たせるという目標の中に「和漢薬を概説できる」という項目が入った。したがって、平成14年度に入学した医学生は卒業までに漢方の基本知識を習得することが明確化され、漢方の医学教育への参入が実現化された。

1. 医学部における漢方教育の現状

平成14年度において全国大学医学部・医科大学80校中、69大学(86.3%)で何等かの形式で漢方の講義を行われており、未実施校は11校(平成15年度に1校は実施予定)となっている。なかでも、21校(26.3%)は4コマ以上の講義を行っている。

2. 名古屋大学医学部における東洋医学教育

名古屋大学医学部においても平成12年度より教育カリキュラムに東洋医学が取り入れられている。平成12, 13年度は、①漢方薬の臨床的なevidence 2コマ、②漢方薬の基礎的なevidence 1コマ、③鍼灸 1コマ、④歴史 1コマ、⑤老年医学における東洋医学の可能性(富山医薬大寺澤捷年教授)1コマとなっている。学生に対するアンケート調査でも、東洋医学への感心度が高く(約90%)、「有意義であった」が80～90%を占めており、平成14年度は10コマが予定されている。

3. 日本東洋医学会における医学教育に対する取り組み

日本東洋医学会では、従来保険診療のための手引きの出版など主として「卒後教育」に重点をおいてきており、医学部学生に対しては、「卒前セミナー」の実施にとどまっていた。しかしながら、上記コアカリキュラムに「和漢薬を概説できる」の項目が入ったことで、入門書的性格の教科書作成の決定がなされ、学術教育委員会(委員長:佐藤祐造)が編集を担当することとなった。タイトルは「漢方医学入門」とし、その内容は、東洋医学総論、診断・治療、薬物学、疾患と漢方、鍼灸、その他、6章から構成されている。年内発刊を目指し、東洋医学会員全員に配付するだけでなく、全国の医学部、医科大学での採用を目指している。

漢方、東洋医学が医学教育に導入されることは決定したが、その望ましいあり方については明確な結論が出されておらず、本学会での教科書作成は、東洋医学の普遍化、標準化への第一歩となりうるものと思われる。